

●芥川也寸志 (1925~89)

『交響管弦楽のための音楽』 (1950)

1944年に学徒動員として陸軍戸山学校軍楽隊に配属されたあと、戦後東京音楽学校の作曲科本科に戻った芥川を迎えたのは、戦前の顔ぶれから一新された教師陣のうちの伊福部昭であった。芥川の創作は、これ以降伊福部の強い影響と、進駐軍放送で聴いたソ連音楽の様式、ことにプロコフィエフやショスタコーヴィチのその上に展開する。

卒業創作として作曲された『交響管弦楽のための前奏曲』(1947)を芥川は生前に聴くことができなかったが、その後オーケストラのために書かれた『交響三章』(1948)やこの『交響管弦楽のための音楽』は、初期の代表作としてしばしば演奏される。ことに後者はNHK放送25周年記念管弦楽懸賞に応募して、團伊玖磨の『交響曲 イ調』とともに特選入賞し、1950年3月21日に近衛秀麿の指揮する日本交響楽団(現在のNHK交響楽団)によって初演されて、芥川の名を一挙に高めた作品である。

「交響管弦楽」という日本語はそう多く耳にすることではないが、欧文タイトル“Orchestra Sinfonica”は通常「交響楽団」と訳されているもので、「交響三章」のTrinita Sinfonica同様、スコアに表示されたスネアドラムを表すTamburo militareなど、楽器編成の用語ともども、発想は統一的に用いられたイタリア語から来ているように思われる。

伊福部の影響は、主に色彩的な管弦楽とオスティナートの手法に現れている。幼少の頃より父・龍之介の所有するストラヴィンスキーのレコードを好んで聴いていた芥川にとって、ロマンティックな和声感よりも躍動的なリズムと色彩が中心の伊福部の音楽は大きな啓示でもあったろう。

「アンダンティーノ」と「アレグロ」という緩急の2楽章からなる全体は、ほぼ全域に均一リズムを刻むオスティナート書法が施されているが、定常的なリズム打ちがあるゆえに、急速な第2楽章ではシンコペーションや三連符の扱いなどが効果的に映えることになる。

[長木誠司]

2 Fl / Picc / 2 Ob / E-Hrn / 2 Cl / Bs-Cl / 2 Fg / C-Fg - 4 Hrn / 3 Trp / 3 Trb / Tub - Timp - Snare Drum / Bass Drum / Cym - Pf - Strings

初演 1950年3月21日 日比谷公会堂
近衛秀麿(指揮)、日本交響楽団(現 NHK交響楽団)
NHK創立25周年記念管弦楽曲懸賞特賞作品



向井航

■ 第33回芥川也寸志サントリー作曲賞受賞記念サントリー芸術財団委嘱作品

『クイーン』

ユーフォニアム、エレキギター、女声アンサンブルと大オーケストラのための(オルガン付き) (2025)

「クイーン (Queen)」という言葉は、クィア・コミュニティにおいて単なるジェンダーのラベルを超え、「媚びない女 (オンナ)」—— 生物学的性別を超えた象徴的な在り方—— を示す。この語は、第3波フェミニズム以降に登場したクィア・パンクやクィア・コアといったサブカルチャーにおいて、既存のジェンダー規範や社会構造に抵抗し、差別や偏見を逆手に取って「逆説的プライド」を体現する存在として使われてきた。

前作『ダンシング・クィア』では、「踊ること」を媒介に、オランダ銃乱射事件を契機とした政治的・芸術的言説を織り交ぜることで、クィア・アート・アクティヴィズムの力と可能性を浮かび上がらせつつ、クィアへのエンパワメントを目的とした。

今作『クイーン』では、歴史的に声を奪われてきたオンナ達がパンクな態度から声を取り戻し、そのリアリティを鮮烈に示すことを試みる。その題材として、インスピレーションの元となったのが、エウリピデス作のギリシャ悲劇『バックスの信女』である。狂気と陶酔、祝祭と暴力が交錯するこの古典を、現代的な儀式—— バッカナリア—— としてよみがえらせる。演劇的な空間を立ち上げるために、今作では、オルガンはゼウス、ユーフォニアムはアポロン、エレキギターはディオニュソス(バックス)、女声アンサンブルはバックスの信女(そのうち一人は天使/ミューズ)と役を与えた。

作品の根底に流れるのは、「あんたはひとりじゃない! (YOU ARE NOT ALONE!)」という普遍的で切実なメッセージである。歴史的に抑圧され、周縁化されてきた女性やクィアの人々、その他マイノリティは、常に孤独と闘ってきた。声と身体、そして音楽によって他者とつながること—— その行為こそが抵抗であり、連帯の可能性であり、希望なのだ。『クイーン』は、そのための芸術的試みである。

Solists: Euphonium - Electric Guit - Female Voice Ensemble
2 Fl / A-Fl (Picc) / 2 Ob / Ob d'amore (E-Hrn) / 2 Cl / Bs-Cl / Fg / 2 C-Fg - 3 Hrn / 3 Trp / 2 Trb / Bs-Trb / Tub - 4 Perc (I=Bird Whistle / Timp / Ratchet / Tam-Tam / Siren / Shaker / Bell Tree II=Bass Drum / Tam-Tam / Standing Percussion Setup [Cym I, II / Bass Drum / Tavolette] / Tri / Surdo / Ratchet / Bird Whistle / Whip III=Vib / Glock / Bass Mar / Antique Cym / Anvil / Tri / Bird Whistle / Dragon Roar / Chime IV=Drums / Wind Chime / Bird Whistle) - Hrp - Pf (Cel) - Org - Strings

向井航 ● Wataru Mukai (1993-)

作曲家、パフォーマー。『ダンシング・クィア』で第33回芥川也寸志サントリー作曲賞受賞。その他主な受賞歴に、第8回クロアチア国際作曲コンクール優勝、メンデルスゾーン全ドイツ音楽大学コンクール独逸邦大統領賞、第86回日本音楽コンクール作曲部門第2位および岩谷賞など。宗次徳二海外派遣奨学生、ローム ミュージック ファンデーション奨学生。東京藝術大学音楽学部作曲科を首席卒業後、独マンハイム音楽大学を最優秀の成績で卒業。ABPU 博士課程を経て、現在、東京藝術大学美術研究科博士後期課程在籍中。



松本淳一

■ 第35回芥川也寸志サントリー作曲賞候補作品

『空間刺繍ソサエティ』 (2024)

初演 2024年11月7日 NHKホール
第93回日本音楽コンクール作曲部門本選会

今作では固有のオーケストラ社会の創造を目指した。

私は意識上で空間にグリッドを描き遊ぶことがある。場のハートを探り空間化たるキワを見定め俯瞰し描く。もし空間が音場ならば音の指向を示すベクトル群を編み物を視るかのように聴く。

音には定位というものが存在する。アコースティックなら楽器の位置が定位となる。デジタルは寄せ集まる定位群が奥行と臨場を産むが、ホールはその実体を味合う場ということになる。加えてアコースティックホールは楽器であり奏者も楽器としてそこに定位を共鳴させ、最終的にはオーケストラ団体の歴史や伝統的位置と振る舞いを通して一つの社会像をも立ち上らせる。

私はこのオーケストラという社会で実体定位を物理的に用い空間に音を編む、という創造の可能性を考えた。

最初に得た着想イメージは、音楽家達が空間に輪郭を作るパタンナーとして各々特殊な定位から音や指令を「投げ縄」の如く飛ばし合うというもので(作内ではLASSOと表現される)、この「投げ縄」の個人主体的操縦がこの曲の全てである。彼らは構造的階層を消し去るソーシャル・イノベーター的立場で、指揮を飛び越え、単身「空間グリッド師」と化し**独自タイミング**で音を連携させ飛ばしあう。一方オーケストラも次第にそれぞれがソリスト化していき全体で生き生きと自律型社会としての音を編む、そんな固有種社会の音楽刺繍で、ステージを囲むスタンドソリスト群とセンターのコンチェルト・グロッソが場を牽引する。

だが今作はそうした力学の表現というよりは、2025年夏このホールに出現する少し変わった社会の誕生や創造を、ただただ皆で共有できたら、という思いでいる。

作内には社会への淡い希求が蕾の絨毯のように全編に渡って敷き詰められている。それら蕾を通して場に編み込まれゆく音楽家達の光路は、やがて封印を解くかのような交響模様となり「全体」と「私」のセンターである「ハート」を軋ませ、促し、再起動させる・・・今作が保有する原動力とテーマである。

Fl / Ob / Cl / Bs-Cl / 2 Fg / C-Fg - 3 Hrn / 2 Trp / 3 Trb / Tub - 4 Perc (I [Right Side] = Mar / Tri / Shaker / 4 Toms / Guiro / Stand Cym / Bird Call II = Antique Cym / Bass Drum / Whip / Vib / Xyl / 5 Wood Blocks / Claves / Egg Slicer / 1 Bow of DB III = Guiro / Snare Drum / Anvil / Whip / Maracas / Shaker / Xyl / Vib / Claves / Ratchet / Egg Slicer IV [Left Side] = Glock / Tri / Timp / Snare Drum / Cabasa / Stand Cym / Bird Call) - Pf - Cel [Stage Center] (Sound Hose & Antique Crank Music Box) - 12 Vn I / 8 Vn II (Slide Whistle) / 6 Va (Slide Whistle) / 8 Vc (Disposable Chopstick) / 6 Cb
LASSO Group (Stand Solists) - L = Picc / Fl / Trp / Ob / Cl / Hrn R = Vn 1 / 2 / 3 / 4 / Va 1 / 2 (Egg Shakers & Flexatones)
Scordatura Group (Stage Center) - Vn II with Scordatura 1 - 7/6 higher / 2 - 1/4 higher / Va with Scordatura 1 - 7/6 lower / 2 - 1/4 lower / 1 Hrp with Scordatura 19 notes - 1/4 higher

松本淳一 ● Junichi Matsumoto

1973年北海道生まれ。国立音楽大学作曲学科卒業。第93回日本音楽コンクール作曲部門第1位、第33回芥川也寸志サントリー作曲賞ノミネート、第91回日本音楽コンクール作曲部門第2位、2011年エリザベート王妃国際音楽コンクール作曲部門ファイナリスト賞、第37回日本アカデミー賞優秀音楽賞。



廣庭賢里

■ 第35回芥川也寸志サントリー作曲賞候補作品

『The silent girl(s)』

ピアノと室内オーケストラのための (2024)

初演 2024年6月11日 東京藝術大学音楽学部第6ホール
ジョルト・ナジ特別招聘教授「第6回作曲科ワークショップ2024」

この作品は、ピアニストを1人の少女に、アンサンブルを少女の周囲の環境に見立てている。以前も同様の構図でピアノとオーケストラのための曲を作曲したことがあるが、その時は「個人」と「集団」の関わり方について言及したのに対し、本作では1人の少女の内面の変化を表現した。人間の内面の感情をどのように表現しようかと考えた時に、ふと思いついたのが1人の少女を2人で演じることだった。この曲ではピアニストと「アシスタント」が同一人物となっている。

また、本作では作曲者によるオリジナルの詩を用いている。少女が内なる自己と葛藤する様子を明確に表現するために音楽に加えて言葉と身体表現も用いた。

The silent girl(s) Satori Hironiwa

This is the story of the girl.
これはとある少女の物語である。

A girl sits quietly inside her, and from time to time the girl comes up to her and hands out her a map.
彼女の中には1人の少女が静かに座っていて、少女は時々彼女の前に来て地図を差し出す。

She senses the existence of another thing inside of herself.
彼女は自分の中に別のものの存在を感じているのだ。

The girl is searching for a sense of belonging to a group.
少女はグループへの帰属意識を求めている。

Because it's the essential for action needed to survive.
それは生き延びるために必要不可欠な行動だから。

Then she heard a voice from inside. "Why not try imitating someone else?"
すると彼女は内側から声を聞いた。"誰かの真似をしてみたら?"

The girl doesn't have a place for herself.
少女には自分の居場所がない。

Her internal existence eventually emerged from her body.
彼女の内なる存在はやがて身体から現れた。

Since she lacks the skill of imitation, silence is her only option.
彼女は模倣の技術を持たないから沈黙が唯一の選択肢。

Save your heart from a sense of solitude!
孤独から心を救いなさい!

Group 1 Fl / Cl (Bs-Cl) / S-Sax / Bar-Saxb - Vn - Perc (Mar / Bass Drum / Whip / 2 Congas / Thai-Gong / Antique Cym / Harmonic Pipe)
Group 2 Ob - Hrn / Trp / Trb - Perc (Vib / Timp / Reversed Cym / 2 Tam-Tams / Tri / Hi-Hat)
Pf Solo / Assistant
Group 3 Fg - Va / Vc / DB - Hrp
Speaker

廣庭賢里 ● Satori Hironiwa

2000年5月22日、徳島県生まれ。国立音楽大学附属高等学校ピアノ専攻を経て東京藝術大学音楽学部作曲科を首席で卒業。同大学院音楽研究科修士課程作曲専攻作曲研究分野を修了。これまでに作曲を大久保みどり、愛澤伯友、野平一郎、金子仁美に師事。



斎藤拓真

■ 第35回芥川也寸志サントリー作曲賞候補作品

『アンティゴネーとクレオン』

ソプラノ、アンサンブル、エレクトロニクスのための (2024)

 初演 2024年9月27日 / パリ国立高等音楽院レミ・フリムランホール
 パリ国立高等音楽院作曲科修了演奏会 第二部

本作は、私が最も美しい悲劇のひとつと考える『アンティゴネー』に人工知能 (AI) ツールを組み合わせるという奇妙な着想によって書かれている。このアイデアは偶然思いついたものだが、現代社会にとっては絵空事とは思えないほどの真実味を帯びているように私には思われる。本作のドラマツルギーは、ソプラノ歌手、AIによって合成された声によるクレオン、そしてそのAIによる声の素材によって浸食され変容した電子音響の三者の対決にある。

しかし、AIを悲劇に結びつけることで、テクノロジーの負の側面を強調することが私の意図ではない。本作で用いられたテキストは全て ChatGPTによって出力されたものだが、ソフォクレスの戯曲やそれに続く様々な派生作品の劇構造に影響を受けたものとなっている。というのも、AIの出力は大量のデータからの機械学習に基づいており、確率アルゴリズムに従って、ある文脈に密接に関連すると思われる単語を選択するからだ。言い換えれば、本作のテキストのドラマツルギーは、AIによって脱文脈化された状態に変換・移動され、シュルレアリスムにおけるデペイズマンのような効果を生み出している。この効果はそれ自体興味深いもので、テキストの連結の仕方によっては、別の演劇的状況を追加したり創造したりすることが可能になる。例えば、本作では、涅槃の概念を想起させる (と ChatGPT が判断した) 日本語のフレーズを組み合わせている (テキストのほとんどの部分は、英語またはフランス語によって書かれている)。

アンティゴネーの死はそれ自体では不幸な出来事だが、それは悲劇の英雄にはつきものである。言い換えれば、彼女の死は人間性の勝利を表しているのだ。テクノロジーの進歩や私たちの社会の進化がいかなるものであったとしても、人としての倫理観や喜びは、個人にとっても社会にとっても失われることはないとは私は信じている。

Fl (A-Fl) / Cl (Bs-Cl) / S-Sax / T-Sax - Hrn / Trp / T-Trb - 2 Perc (I=Mar / Crotales / 2 Bongos / 2 Congas / Bass Drum / Ratchet / Suspended Cym / Flexatone / Thunder Sheet II=Vib / 2 Bongos / 2 Tom-Toms / 2 Tam-Tams / Piece of Polystyrene / Ratchet / Waterphone) - Pf - MIDI Keyboard - Strings - S Voice

斎藤拓真 ● Takuma Saito

1992年4月22日横浜市生まれ。2015年、上智大学フランス語学科卒業。19年、パリ国立高等音楽院作曲科入学。24年、作曲科第二課程を首席で卒業。同年、フランス芸術アカデミーによりマルモッタン邸の24/25年度のレジデントアーティストに選出される。